

## 化石研究グループの紹介

## サメの歯化石研究会

田中 猛\*・上野輝彌\*\*・後藤仁敏\*\*\*

\*〒256-0816小田原市酒匂1丁目25-40-311・\*\*国立科学博物館・\*\*\*鶴見大学短期大学部歯科衛生科

## The Japanese Club for Fossil Shark Tooth Research

Takeshi Tanaka\*, Teruya Uyeno\*\*, and Masatoshi Goto\*\*\*

\*1-25-40-311, Sakawa, Odawara 256-0816; \*\*National Science Museum, 3-23-1 Hyakunincho, Shinjuku-ku, 169-0073; \*\*\*Department of Dental Hygiene Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-ku, Yokohama-shi, 230-8501

## サメの歯化石研究会発足の経緯

サメの歯化石研究会の発足は、著者の一人である後藤が地学団体研究会第50回総会シンポジウム要旨集(1996)に書いた「サメの歯から人体地質学への道」の中で「…将来は魚類化石ないしサメの歯化石についての団体研究を発足させたいと考えている…」という一文を田中が見つけたことが始まりである。田中はさっそく後藤に連絡をとり、サメの歯化石を研究する団体研究会発足への準備に入った。そして研究会としての活動内容を詰めて、1997年に「サメの歯化石研究会」が発足した。その後、上野にも連絡をとり、組織については、3人で協議した結果、とくに会長は置かずに、この3人が世話役という形で研究会を運営することにした。また、事務局は田中が担当し、会の名称を「サメの歯化石研究会」として以下の目的で活動することを決めた。

- 1) サメの歯化石についての発見・研究・論文・本などの情報を集めて会員に知らせる。
- 2) サメの歯化石の標本について、個人あるいはさまざま

な人々との共同研究を進める。

- 3) そのために連絡誌「サメの歯化石だより」を発行する。
- 4) サメの歯化石の採集会、勉強会や討論会などを開催する。
- 5) その他、会員の要望にもとづくいろいろな活動をおこなう。

この呼びかけに、2003年7月1日現在92名の会員が集まっている。なお、本会は「研究会」という形式をとっているが、特定の学会の下部組織ではなく、独立した活動を行っている。

## サメの歯化石研究会の活動

前述の活動目的を達成するために、連絡誌「サメの歯化石だより」を不定期に年4回発行し、第27号まで達している(表1)。内容は化石のサメの歯に限らず、現生のサメに関する話題まで、自由奔放、玉石混交のきらいがあるものの、堅苦しくない、気楽に投稿できる内容である。特に、この連絡誌に毎回のように登場する「サメの歯紹介」の欄

表1. サメの歯化石研究会のあゆみ。

|          |  |
|----------|--|
| 1997年3月  | サメの歯化石研究会創立 会員2名(事務局:小田原市酒匂1-25-40-311, 田中猛)<br>「サメの歯化石だより」No.1発行 入会の呼びかけ                                    |
| 1997年6月  | 「サメの歯化石だより」No.2発行 会員37名になる   |
| 1997年9月  | 「サメの歯化石だより」No.3発行 世話人として, 上野輝彌・後藤仁敏・田中猛の3名, 会員43名  |
| 1997年12月 | 「サメの歯化石だより」No.4発行 会員47名  |
| 1998年1月  | 第1回サメの歯化石研究の集い開催(日本古生物学会1998年年会小集会, 神奈川県立生命の星・地球博物館にて) 5題の講演 約70名参加規約の決定                                     |
| 1998年2月  | 「サメの歯化石だより」No.5発行 会員61名  |
| 1998年11月 | 第2回サメの歯化石研究の集い開催(第111回化石研究会例会シンポジウム「日本産サメ化石の研究の現状と課題」化石研究会・葛袋地学研究会と共催, 群馬県立自然史博物館にて) 9題の講演とサメの歯何でも相談室 約70名参加 |
| 1999年3月  | 「サメの歯化石だより」No.10発行 会員63名   |
| 2000年11月 | 「サメの歯化石だより」No.17発行 会員76名   |
| 2001年7月  | 課題別シンポジウム「軟骨魚類の古生物学」(日本古生物学会2001年年会, 国立オリンピック記念青少年総合記念センターにて)開催 8題の講演者すべてが本会会員                               |
| 2001年8月  | 「サメの歯化石だより」No.20発行   |
| 2002年9月  | 「サメの歯化石だより」No.24発行カラー印刷にする   |
| 2003年1月  | シンポジウム「サメの分類と系統」・講演会「サメについて分かったこと」(神奈川県立生命の星・地球博物館にて)を共催 本会会員4名が講演   |
| 2003年5月  | 「サメの歯化石だより」No.27発行 会員90名   |



図1. サメの歯化石研究会の活動により論文化された標本(高桑ほか, 2001). 群馬県富岡市の富岡層群井戸沢層から産出したラブカの仲間 *Chlamydoselachus* sp. (群馬県立自然史博物館収蔵GMNH-PV-1116: 山澤 隆撮影). スケールは1 cm.

は、今まで個人が採集して、眠っている標本を簡単な形で報告できるスタイルをとっている。この「サメの歯紹介」で投稿したことがきっかけになり、次に学術雑誌に報告するステップになるよう推進している(図1)。また、国内外で研究発表された最近の研究論文や本の紹介も行っている。

また、今までに、研究会集として、下記のような活動をしている。

- 1) 1998年1月: 第1回サメの歯化石研究の集い開催(日本古生物学会1998年年会小集会, 神奈川県立生命の星・地球博物館にて) 5題の講演, 70名参加。
- 2) 1998年11月: 第2回サメの歯化石研究の集い開催(第111回化石研究会例会シンポジウム「日本産サメ化石の研究の現状と課題」化石研究会・葛袋地学研究会と共催, 群馬県立自然史博物館にて) 9題の講演と「サメの歯何でも相談室」を実施, 約70名参加(図2)。
- 3) 1999年8月: 「日本産ラブカの歯化石とラブカ類の進

化」を地学団体研究会第53回総会(長野県勤労福祉センター)にて発表。

- 4) 2001年7月: 日本古生物学会2001年年会ミレニアムシンポジウム「21世紀の古生物学」のなかで課題別シンポジウム「軟骨魚類の古生物学—研究の現状と課題—」が開催される。8題の発表があり、いずれも発表者は本会会員。

- 5) 2003年1月: 神奈川県立生命の星・地球博物館で実施された特別展「ザ・シャーク」のシンポジウムと講演会を後援する。会員4名の方が講演する。

この中で、3)の発表は「後藤仁敏・サメの歯化石研究会」という名前で行われ、本会会員の人見友幸氏・山澤隆氏・伊達芳正氏の採集した標本をもとに、共同研究された発表であった(図3)。個人が採集した標本が、なかなか公にならない現状を踏まえると本会が果たした役目は大きいと考える。この発表に限らず、個人が採集したサメの歯化石の鑑定や公表(報告)などの助けになるよう努めており、その成果もあがっている(表2)。そして本会が日本でのサメの歯化石の研究の中心的な存在になることを目指している。なお、活動の詳細については本会のホームページ(<http://www1.odn.ne.jp/shark/>)も参照されたい。

## 今後の展望

国内の多くのサメの歯化石の好きな方が参加され、プロ・アマの隔たりなく、研究できる組織づくりを進めてきた。今後もできるだけ、みなさんが採集した珍しいサメの歯化石を公表できるようにお手伝いをしていきたい。よく、アマチュアが採集した標本を、そのまま個人で持っている「標本の死蔵」と批判される。プロの立場からすれば、大事な標本、特に新種になるような標本は、設備などの整った博物館や大学のような公共的な機関に寄贈するべきであ



図2. 「第2回サメの歯化石研究の集い」での会員の集合写真(1998年11月: 群馬県立自然史博物館にて)。



図3. 会員の研究発表(1999年8月: 地学団体研究会第53回総会にて).

る。しかし、プロの研究者が標本の寄贈を受けても、研究が進まず、貴重な標本がそのまま放置されている場合もある。このような場合、預けたアマチュアにとっては、さみしい限りである。アマチュアは基本的にコレクターで、自分が苦労して採集した標本には、思い出があり、親しみがある。いわゆる「宝もの」である。しかし、プロの研究者にとっては、それはただのひとつの材料でしかないのかもしれない。このようなギャップからアマチュアとプロの研究者との間でトラブルが存在するのが現実である。すべての研究者がそのような方とはいわないが、まだまだ、大学、博物館などのハード・ソフト面がともに整っていない。

本会では事務局に研究の依頼がきた標本は、責任をもって研究者にお渡しし、紛失などないように心がけている。また、プロの研究者に預けるばかりではなく、自分の手で研究を推し進めていく協力もしている。この関係を繰り返していくうちに、アマチュアとプロの研究者の溝が埋まり、今までの多くの問題も解決すると思っている。そのような方向を目指して、サメの歯化石研究会は活動をしてゆきたい。そして、日本のサメの歯化石研究の推進的存在でありたいと思っている。

サメの歯化石に興味がある方、または、これからサメの歯化石を研究したいという方は、住所、氏名、電話番号、所属および、簡単な自己紹介を事務局に送付し、年会費を納入すると会員になることができる。年会費は1000円で年度は1月から12月となっている。なお、事務局への連絡先は以下のとおりである。

〒256-0816 小田原市酒匂1丁目25-40-311 田中 猛  
メールアドレス: shark@hkg.odn.ne.jp

## 文献

- 後藤仁敏, 1996. サメの歯から人体地質学への道. 地学団体研究会第50回総会シンポジウム要旨集, 155-158.  
後藤仁敏・サメの歯化石研究会, 1999. 日本産ラプカの歯化石とラプカ類の進化. 地学団体研究会第53回総会シンポジウム・ポスター要旨集, 143-144.

表2. サメの歯化石研究会の会員による研究成果.

- 矢部英生・後藤仁敏, 1999. 板鰓類の歯に関する用語. 化石研究会会誌, **32**, 14-20.  
中野雄介, 1999. 中新統備北層群から産出した板鰓類化石群. 島根大学地球資源環境学研究報告, **18**, 109-125.  
中野雄介, 1999. 島根県布志名層産中新世板鰓類化石群. 瑞浪市化石博物館研究報告, **26**, 141-148, pls. 9-11.  
矢部英生, 1999. 山形県最上郡真室川町大沢の野口層(鮮新世)から産出した板鰓類化石. 山形県真室川町鯨類化石調査報告書, 171-186.  
野村正純, 2000. 岩屋化石動物群シリーズ, その4; 中期中新統七尾石灰質砂岩層から産出したギンザメ属の下顎歯化石について. 七尾市少年科学館研究報告, **4**, 43-64.  
田中 猛・加島昭二, 2000. 漸新統, 芦屋層群産出のトラザメ属の歯. わたしたちの自然史, **73**, 3-7.  
矢部英生, 2000. 山形県立川町科沢の科沢層(上部鮮新統~下部更新統)から産出したメジロザメ類の歯化石. 山形応用地質, **20**, 53-56.  
後藤仁敏・兼子尚知・鈴木雄太郎・大倉正敏, 2000. 本邦古生界からのクセナカントゥス目サメ類歯化石の発見. 地質学雑誌, **106**, 737-742.  
高桑祐司・後藤仁敏・長谷川善和・山澤 隆・高山義孝・清水 勝, 2001. 群馬県富岡市および安中市の富岡層群(下部~中部中新統)から産出したラプカ属(軟骨魚類・板鰓亜綱)の歯化石. 群馬県立自然史博物館研究報告, **5**, 19-30.  
田中 猛, 2001. 三浦半島の三浦層群より産出した板鰓類化石. 神奈川自然誌資料, **22**, 73-80.  
金子正彦・後藤仁敏, 2001. サメ類の異常歯に関する一考察. 化石研究会会誌, **34**, 18-30.  
野村正純, 2002. 岩屋化石動物群シリーズ, その7; 中期中新統七尾石灰質砂岩層のサメの歯化石について. 七尾市少年科学館研究報告, **6**, 1-56.